

鉄砲洲神社 論語素読 解説

(平成 21 年 5 月 1 日)

通八 しいわ 子曰く、くんし 君子 おも 重からざれば すなわ 則 い ち威あらず。 まな 学べば すなわ 則 こ ち固ならず。 ちゅうしん 忠 しゅ 信を主
おのれ とし、 し 己に如かざる もの 者を とも 友とすること な 無かれ。 あやま 過 すなわ ちては あらた 則 はばか ち改むるに な 憚ること
勿かれ。

孔先生が言われるには、君子はどっしりと構えていなければ、威厳がない。学ぶ事によってがちがちに固まる事はない。

学ぶ事によって頭の中が常に柔らかく、どういう内容でもずっと素直に受け止める事が出来ます。年をとるにしたがってだんだん頭の中が固くなってくると、人の言う事を最初から聞く耳を持たぬ事になりがちなので、年をとればとるほど学ぶ事によって柔らかくする努力が必要であろうということです。

律儀で約束を守ることを第一とし、或いはそうした人と親しみ、自分に及ばないと思う者は友人として選んではいけない。

失敗したなと思った時には、素直に間違いを認めて直そうではないか。そうする時は、誰にも憚る事はない。

失敗してしまったら、ぐずぐずせず、素直に直せという意味です。

通九 そうしいわ 曾子曰く、 おわり 終 つつし を とお 慎 お み たみ 遠きを とく 追えば、 あつ 民の き 徳 き 厚きに き 帰す。

「終」とは、死とか親の葬儀という意味です。

「遠きを追えば」は、遠い祖先の事を祈り供養をする事です。

曾子が言うには、人様が死んで葬式を出す場合には、誠を尽くす考え方で葬式に望み、先祖の祀りごとを怠らなければ、国民の徳はだんだん厚くなっていく。君主の祭祀・供養が、常日頃から手厚ければ、その君主の人徳が自然と国民に伝わっていくものである。

今の時代で言えば麻生さんとか、又、一方の雄の小沢さんあたりが親を大事にして、孝養を尽すという事がごく当たり前になっていれば、国民もそれを真似るであろうとお考え下さい。

通十 しきん 子禽 しこう 子貢に と 問いて いわ 曰く、 ふうし 夫子の こ 是の くに 邦に いた 至るや、 かなら 必ず そ 其の まつりごと 政 き を これ 聞く。 もと 之を そもそ 求めたるか、 これ 仰 あた も しこうい 之を ふうし 与えたるかと。 おんりょうきょうけんじょう 子貢曰く、 もつ 夫子は これ 温 これ 良 これ 恭 これ 儉 これ 讓、 これ 以て これ 之を

え ふうし これ もと そ こ ひと これ もと こと
得たり。夫子の之を求むるは、其れ諸れ人の之を求むるに異なるかと。

子禽が子貢に聞きました。

「孔先生はどここの国に行っても、必ずそこの国のトップの人達から、政はどうすれば良
かろうという相談に預かる。これは孔先生が、話を聞きに来てくれるよう根回しをしたの
か、それとも自然とその国の君主が聞きたいと思って来るのでしょうか。」

子貢が答えました。

「孔先生は穏やかで、素直で、恭しさを持ち、慎ましやかで、控えめである。こういう
人柄だからこそ、何も根回しなどしないのに、自然とその国の君主が孔先生の評判を聞いて、
自ら聞きたいと思って訪ねて来るのだ(又は、迎えを出すのだ)。仮に孔先生が、話を聞
きに来ませんかというように少し流したとしても、それは普通の人やり方とは全然違う
だろう。」

今回は、「渋澤論語」には面白い解説がなかったので、違うものを一つご紹介します。

佐藤一斎が「君子 重からざれば則ち威あらず」という文言を、『言志四録』の中で同じ
内容を紹介しています。

重役や重臣とは、見ただけで重々しさが伝わってくるというような立居振舞い・顔色で
なければいけない。見るからに軽々しいような人間を重役のポストにつけてはいけな
い・・・というように書き残しています。

佐藤一斎門下で竜虎と言われた人が、佐久間象山と山田方谷です。佐久間象山のお弟子
さんは吉田松陰が有名ですし、山田方谷のお弟子さんは河井継之助と三島中洲が有名です。

河井継之助が山田方谷のお弟子さんになった時の経緯、問答の一つを紹介します。

「山田方谷先生は、佐久間象山という人物をどう思われますか？」と、腹の中では佐久
間象山は態度が大きくて面白くないと思いつつ、河井継之助が尋ねました。それに対して
山田方谷は答えませんでした。重ねて聞くと、

「象山に、温・良・恭・儉・讓たとえ一つでも身に備わっていると思うかい？」と云う返
事が返ってきたそうです。

佐久間象山という人物は、温・良・恭・儉・讓の一かけらもない人間だったというエピソード
が残っていますのでご紹介しました。

本日は以上です。有難うございました。